

紙と鉛筆があれば

私が学んだ大阪の大学の心理学教室には、学生や教官が、空いた時間に立ち寄っては駄^だ弁^{べん}つて過^すす「学生室」とよばれる大部屋がありました。そこでの何気ない会話でしたが、特に印象に残っているのが、研究指導をしてもらっていた教官の「心理学実験は紙と鉛筆があればできる」という言葉です。

私の専門領域の知覚心理学では、私が学部生だった一九八〇年代後半には、パソコンを使って画像などを示し、実験参加者に何が見えたかを答えてもらったり、何かが見えるまでの時間を測定したりする実験を実施し、その結果から知覚の特性を検討するという、今でも使われている研究手法が主流になっていました。

そんな時節、実験をするために必要な環境は？という話題になった際に、先生が「紙と鉛筆があれば実験ができる」と言われたのです。

確かに、実験用の画像は紙と鉛筆で作れなくはありません。でも、紙と鉛筆だけで実験用の画像を作成するのは手間と時間がかかるし、それを使って実験を実施するよりはパソコンなどを使ったほうが楽ですよ、と率直に感想を言ったように思います。

「ほんまに紙と鉛筆だけで実験せえと言ってるわけちゃうねん」と苦笑した先生。説明を続けてくれました。そのため、特別な道具がなくても、自分で実験用の画像を見て、その結果を紙と鉛筆で記録すれば実験は成立する。ただし、どんな画像を見ても有意義な実験になるわけではない。本当に大事なものは、実験装置などの道具ではなく、知覚の特性についての洞察と、その特性を可視化するための画像などの実験条件についてのアイデアだ、と。

なるほど、と思いました。それ以降、実験をする際、その実験には知覚や心の特性に関する洞察があるのか、自問自答しています。また、気がつく、学生に「紙と鉛筆があれば実験ができる」と言っている自分がいます。



1965年、宮崎県生まれ。千葉大学大学院人文科学研究院教授。光村図書小学校『国語』教科書「時計の時間と心の時間」筆者。専門は実験心理学。実験的手法を用いて、人間の知覚認知過程や感性の特性について研究を行っている。著書に『時計の時間、心の時間』（教育評論社）、『大人の時間はなぜ短いのか』（集英社）、『ヒューマンエラーの心理学』（筑摩書房）などがある。